

# 二松學舎 松苓会報



## CONTENTS

- P2 卒業される皆さまへ
- P3 第16回二松学舎大学ホームカミングデー
- P7 教壇を去られる先生方
- P9 松苓会支部情報  
北海道支部・岩手県支部・宮城県支部・埼玉県支部・東京都支部・  
神奈川県支部・長野県支部・新潟県支部・富山県支部・愛知県支部・  
奈良県支部・広島県支部・宮崎県支部・鹿児島県支部
- P13 同期会・OBOG会
- P14 大学だより
- P15 恩師からの便り 学生歌とその時代
- P16 卒業生だより 会員からの便り
- P20 北から南から
- P21 学生会員だより
- P22 学生の活躍
- P23 松苓会からの案内
- P24 第89期卒業生同期会 寄付者芳名 訃報 編集後記

No.65 2021年3月16日  
二松學舎大学同窓会広報誌

## 89期生の皆さんへ



二松學舎松茶会  
会長  
廣田 克己

「ご卒業おめでとうございます。二松學舎松茶会」（以下、松茶会）は皆さんを歓迎いたします。

皆さんは同窓会創立から89回目の卒業生です。松茶会は母校の前身である二松學舎専門学校1期生の卒業とともに1931（昭和6）年に創設されました。卒業生は約3万人おり、世界中の様々な分野で活躍しています。47都道府県に支部があります。そして、昨年からは同期会がスタートしました。今日から皆さんは居住する都道府県の支部会員であり、89期同期会員でもあります。

さて89期生の皆さん、あなた方が卒業後に最初に行うことは、保護者の皆さんに感謝の言葉を伝えることです。子育ては人生の一大事業です。その保護者の皆さんが今日、慈しみ、育て上げた子を社会に送り出すという節目を迎えたのです。お祝いと感謝の言葉を受けるべきは保護者の皆さんです。

次に、これから飛び込んでいく場所での自分の居場所を一日も早く作ってください。社会はそれほど甘いものではないことはご存じの通りです。皆さんは、コロナ禍で騒然とした大学最後の年を、全く誰もが予想もしなかった学生生活を苦しみ、悩んで乗り越えた経験をしてきました。これから世界は新しい時代に入っていきます。そんな社会に飛び込んでいくのは不安だと思います。しかし居場所は与えられるのではなく、自分で作るものです。これまで身につけて来た力を未知の世界で大いに発揮してください。

さあ、いよいよ皆さんが自分の足だけで歩む生活が始まります。当分は余裕などないかもしれません。時々帰ってきてください。恩師や学友、先輩・後輩たちとの語らいは、きっと明日からの力になると思います。同窓会というネットワークも大学で得た財産の1つです。時間が取れない時でも松茶会との繋がりが作っておいてください。「松茶会」はいつでも皆さんを待っています。

最後に、今後、松茶会との連絡や同期会、行事などの連絡、案内、また会報の送付は、大学入学時に一人ひとりに配布されたメールアドレスを利用します。大切に保存しておいてください。

どうぞ身体に気をつけて、しなやかに、逞しく生きてください。またお会いしましょう。

## 卒業される皆さんへ



二松學舎大学  
学長  
江藤 茂博

本日、二松學舎大学をご卒業される皆様、おめでとうございます。そして、同窓会の皆様、本年度は、新たに卒業生として630名を超える後輩を送り出すことができました。新しい卒業生として、松茶会の皆様に続き、また皆様とともに、この社会の様々な場で活躍していくことでしょう。虎口溪舎として二松學舎と、160年にも及ぶ学祖三島中洲の学びの精神は、ここに脈々と受け継がれ、今日まで社会に有為の人材を送りつけています。

二松學舎は、漢学者三島中洲師の理念を受け継ぐ者たちが支えている私立学校です。そういう意味で、卒業生である君たちこそが、諸先輩方と共に、この二松學舎大学のこれからをさらに育てていくのです。君たちの活躍と支えとが、この二松學舎大学の存在を確固たるものにしていくこととなります。これは、私学の原点でもあり、さらに繰り返すと、私ども教職員は君たちの諸先輩方と共に、次の時代に活躍する優れた人材

を育成することを使命としています。ご卒業される皆様は、今後の人生において、良くも悪くも、二松學舎大学の名称やそこで学んだことを、いろいろな場面で、君たちの言葉として繰り返すことになるかと思っています。私ども教職員は、君たちにとって誇るべき私立学校としてその存在価値をより高いものにするべく努力を重ねます。皆様は、誇るべき卒業生のひとりとして、また何よりも日々を大切にすべしという人間として、決して我欲に溺れず、豊かな公共心を持って、これからの新しい社会を築いてもらいたいと思います。二松學舎で学んだ学問は、君たちを新しい社会で有為な人材として活躍してもらいものでもありません。

ただ、この卒業までの一年間、新型コロナウイルス感染症拡大を防ぐために、大学での教育研究は、特別な環境での持続になりました。それでも、君たちと共に守ることができた二松學舎の学問教育は、今後の本学の歴史において記憶されるべきものです。それはまた、幾つもの戦争を含めた多くの社会的な変動変革のなかで、二松學舎の教育研究を守り続けた諸先輩方の努力をあらためて私共は振り返ることになりました。

本日、これまでの二松學舎の卒業生による組織である松茶会の皆様と共に、新しい仲間登壇を喜びたいと思います。何よりも私は、新しい卒業生である君たちこそが、これからの二松學舎を大きく展開させる者たちであることを喜びたいと思います。ここに書き記します。

## 第16回 二松学舎大学ホームカミングデー

第16回となる2020年度二松学舎大学ホームカミングデーは、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、卒業生をキャンパスに招いての開催を中止し、Web上に特設ページを開設して実施しました。

ホームカミングデー特設ページでは江藤茂博学長、廣田克己二松學舎松茶会会長によるあいさつ動画や、文学部国文学科の磯水絵教授、山崎正伸教授、中国文学科の牧角悦子教授、国際経済学部国際政治経済学科の押野洋教授、白石まりも教授による卒業生へのメッセージ動画を公開。また、今年度の特別企画として開催した「私の日常“ワンシーン” Web写真展」(応募期間：2020年10月26日から11月30日)には、幅広い年齢層の卒業生から風景やお気に入りのお店、趣味の作品、ペットのかわいい姿など、個性豊かな写真が数多く寄せられました。誌上でもお楽しみください。ご応募いただいた皆さま、ありがとうございました！

二松学舎大学ホームカミングデー実行委員会

### ◆◆◆◆ 「私の日常 “ワンシーン” Web写真展」 誌上公開 ◆◆◆◆

※お名前はニックネームの場合もあります。



#### シャインマスカットが実るのはいつ？

文学部 1981 年卒  
小町 邦明

シャインマスカットの小さな苗を植えて2年。今年は高級な有機肥料を与えました。これまでは写真にあるシャインマスカットの絵が描かれたタグで実った気分を味わってきました。来年は本物の実を付けてくれるでしょうか。



#### たまぐれ

文学部 1981 年卒  
高柳 幸雄

九段下駅に向かう途中、最近ライトアップされた日本武道館を目にして、思わず撮った一枚です。



#### 我が子

大学院 2012 年卒  
尾上 (内村) 友紀

5年前に里親サイトから引き取りました。来た当初は目がおどおどしていましたが、今ではキラキラ笑えるようになりました。研究で行き詰まった時はなでなでて力を分けてもらっています。



#### のぶにゃがの野望

文学部 2020 年卒  
ごえもん

新社会人として荒んだ日々を過ごす私の心を唯一癒してくれる、看板猫ののぶにゃが君の写真です。外にいるカラスが気になるようで、カメラ目線はくれませんでした。彼は今晚、夢の中でカラスを捕まえていることでしょう。



#### マイホームでタコスパーティー

国際政治経済学部卒  
たればんだ

友人を招いてタコスパーティーを行いました。みんなでワイワイ手作りをしました。とても美味しかったです。



#### 稜線歩き

文学部 2019 年卒  
hirari

山梨県の大菩薩嶺へ行きました。稜線歩きの最中の一枚。山の上の季節は、もう秋のようです。





**部屋と猫と私**

国際政治経済学部 2017 年卒  
きゃみー

猫カフェに行ったときの写真です。  
県内では猫カフェが少なく、私自身もペットを飼っていないため新鮮な気持ちで過ごすことができました！



**お外で乾杯**

国際政治経済学部 2004 年卒  
とらお

外での乾杯はなんだか特別な感じがして、いつもより美味しく感じました。今年は友達や職場の先輩とごはんに行けない分、妹と静かに楽しむ時間が多くなりました。これはこれで良いかも。



**水潤天府・2019 成都旅行**

文学部 1993 年卒  
上高宮あこ

去年33年ぶりに三国聖地の成都を再訪しました。世界に平穏が戻り、また旅に出られるよう心から願っています。



**IAI スタジアムから望む富士山  
2020**

文学部 1992 年卒  
パルさん

よく晴れた日に撮影。きれいに撮れました。



**豆猫、豆犬、豆くまモン。  
ねこ松もいるニャ〜☆**

文学部 1983 年卒  
鈴木 信子

余暇に、作っている小さな作品たちです。石粉粘土で形を作り、和紙を貼って仕上げます。右上の豆猫たちは、飛行機に乗って熊本へ。7月の豪雨災害の被災地支援のため、熊本市内で販売していただき、売上げの全額を寄付しています。



**かわいいポーズ**

国際政治経済学部 2012 年卒  
コパン

コロナウイルスの影響で家でYouTubeを観ている時に撮りました。とてもかわいいポーズをして視聴している姿に癒されました。



**日蓮大聖人大銅像  
(茂原市藻原寺にて)**

文学部 1994 年卒  
山口 朗

お休みの日には参拝しております。コロナ禍の状況下、一日も早い終息を願いながら。合掌



**子供へのプレゼント**

文学部 2007 年卒  
もんちゃん

最近の趣味は子供の持ち物に付けるプラ板作りです。



**長生きするために**

文学部 1994 年卒  
にこらす敬二

糖質制限ダイエットに励んでいます



**ベランダの楓**

文学部 1991 年卒  
わんがん

今年は、コロナのせいで、外出もせずベランダで過ごすことが多く…わりと良く紅葉してくれました。



**元気いっぱいのお花**

国際政治経済学部 2013 卒  
れいしん

祖母の家に遊びに行った時、ふと庭を見ると真っ赤なガーベラが咲いていたので思わず撮影しました！祖母いわく、特に何もお世話をしていないとのことですよ（笑）



**鋸南の夕陽**

文学部 2005 年卒  
あーこ

先日、鋸南町ヘショートリップ  
久々の千葉の海と綺麗な夕陽に家族で癒されてきました！！



**木枯らし1号**

文学部 1985 年卒  
菅原 義博

枯葉散るテラスの午後3時。職場内のお気に入りスポットです。



**自転車旅**

文学部 1996 年卒  
松戸太郎

天気の良い日に自転車旅をしてきました。



**花時ドライブ**

文学部 1993 年卒  
ニフリート

桜の季節は愛車でお花見を楽しんでいます。



**最寄駅からの夕景**

文学部 1991 年卒  
マーベリック

地元最寄駅から見える富士山の夕景です。通常、仕事からの帰宅時は既に真っ暗で何も見えません。



**城下町を走る列車**

文学部 1998 年卒  
伊予のたつ

わが町のシンボル、大洲城の前を人気の観光列車「伊予灘ものがたり」が通過する瞬間をとらえました。小さな城下町ですがいいところです。コロナ収束の際にはぜひお越しを！



**母校惜敗**

文学部 1982 年卒  
サンタ

試合で得点が入ると、NHKエールの古関裕而先生作曲の学生歌を歌います。今年はコロナで歌えず、惜敗。雨海先生が奮闘なされて制定された学生歌は、今も歌い継がれています。



### 夏の思い出

文学部 1998 年卒  
みっきー

陶芸体験の作品が忘れた頃に届きました。まずまずの出来栄え!?



### 元気にやっています♡

文学部 1996 年卒  
とよ

2015年に未亡人になりました。亡き夫の家業を継ぐため、鍼灸の学校で勉強中です。(ガイコツとかお灸とか鍼を刺している写真はそのため) いろいろありましたが、山之ゼミの間には感謝の気持ちでいっぱいです。追伸：編入仲間みんなへ、携帯は以前と同じです!



### 清洲橋と屋形船

文学部 2001 年卒  
しのらあ

自宅の近くから墨田川を撮影。新型コロナウイルス国内初のクラスターと言われている屋形船。まだまだ苦しい状況かと思いますが、運航している姿を見て少し安心しました。やはり墨田川には屋形船がよく似合う。



### 伝統を次世代へ繋ぐ

文学部 1998 年卒  
新里 (熊倉) みどり

日本舞踊を通して、たくさんの人に日本の精神や文化を伝えていきたいと思っています。コロナ禍での舞台は様々な制約がありますが「表現するって楽しい!」と感じられる活動を模索し続けていきます。



### 私の大好きなカレー屋さん

文学部 2015 年卒  
カレー大好き

日本ではテラス席で食事ができる季節が少ないのが残念です。このカレー屋さんにはテラス席があり、都会ですが緑を見ながら食事をする事ができます。



### 日立柏サッカー場

国際政治経済学部 2018 年卒  
レイくん

日立台は大学1年の頃から通い始め今でも足を運んでいます。客席とピッチの距離が近く、スタジアムの臨場感は写真で見ると以上のものがあります。ここに来れば嫌なことも忘れられる、自分の家の次に落ち着く場所です。



### 新宿西口周辺

国際政治経済学部 2014 年卒  
立山 優

最近の新宿西口をパシャリ。いつコロナの患者が増加する前に、不要不急な外出は控えましょう。



### 日吉より

文学部 1996 年卒  
ぐりぐら

近所の銀杏並木も色づいてきました。



### フロストムーン

文学部 1996 年卒  
とみー

職場(群馬県某高校)から見た月です。このあと仕事の疲れを癒しに伊勢崎もんじゃ食べに行きます!



## 教壇を去られる先生方

教師は文化にたずさわる人々

水絵



Eテレ「100ブルデューの『デイズタンクシオン』」が取り上げ

られていた。冒頭の論題は、その解説中であつた語である。筆者は東京に生を受け、父親が報道関係にあつたことをよいことに、手に入る招待券を使い、高校時代から所謂展覧会等によく通つていた。大学に入学してからは、映画の試写会が九段会館や、銀座ヤマハホールであつたから、それにもよく行つていた。だから、

本学が各文化施設のキャンパスメンバーズに加入してからは、学生を誘つては東京国立博物館等に一緒に行つていた。

ところが、今年は新型コロナウイルス禍によつて、授業も4月当初からオンラインとなり、学生との接触は限られ、各種文化施設も門戸を閉じた。定年前のこの時期にである。気持ちを切り替えて来し方の論文を纏めたり、新しい論文を書き始めたりしてはいるが、PCをワープロ代わりにしか利用してこなかつた筆者にオンライン授業は面倒で、いきおい院生の力を借りなければならなかつた。が、御蔭で授業補助に来てくれる院生とは半ば対面を果たし、修論

## 博論の指導は順調に推移した。副産物

物は、演習に挑む学部生とのショートメールのやりとりにより、関係がcaえつて濃密になり、指導もいつにも増して深くなつたことであろうか。そんな彼等と、密にならない程度の人数で、鎌倉文学散歩を敢行したり、台東区の一葉記念館を訪れたりしている。施設は来訪者を待つて

いる。さて、話は前後するが、10月に入ると対面も一部叶うようになり、近所の図書館利用で限界を感じた学生達は、本学国文研究室を利用するようになり、オンライン図書館の利用も上手になつた。今や演習資料はA4用紙で10枚は下らず、なかなかの研究発表を堂々と行なうようになつた。この学生達と別れ、筆者は4月からどうするのだろう。研究は終わらない。在校生とのメール交換も途絶えはしないだろう。望むらくは、そうした彼等と、時に東京国立博物館や山種美術館といった文化施設で遭遇することである。京都、奈良で邂逅するのもよい。主人は逝つてしまつた。筆者はアドレスホッパーとなつて、これからは、まだ見ぬ文化の世界へ足を伸ばしていこうと思つている。

(昭和53年二松學舎大学大学院文学研究科博士課程満期退学。博士(文学)。文学部教授。図書館長・副学長歴任)

## 二松学舎の縁は

山崎正伸



昭和44年4月に文学部国文学科に入学して、令和3年3月に定年退職を迎え

る。なんと長く同じ所に留まつていたのだろう。白衣と顕微鏡の世界を夢見ていたのに。まるで違う世界に入り、そして、長く留まつてしまつたと思う。入学式は九段会館。学長加藤常賢先生の式辞に、日本一の国会図書館が近くにある。開架式で、手に取り買うことも出来る古書店街が坂の下にあるという話に感激した。授業が始まつて、図書室に失望した。書庫に入つたけれど、三島中洲先生の書き込みがあつた『儀礼』を見つけたくらいしか記憶がない。しかし、そのおかげか、毎日の古書店通いが楽しく思えた。夏休みには、今は無いが、北澤書店で冷たい飲み物と椅子を出してもらへるようになった。また、欲しくて手に取つていた本を、番頭の福原さんが、お使いにと風間書房に、3冊を電話注文して、初めて出版社に行つた。着流しのご老人が北澤の丁稚かと、はあ、と言つたら本を渡されて支払いをした。書店に戻つて、本を渡したら、自分が買つてきたのだろうと。驚くほど安価で欲しかった3冊、三十六人集上下と古今和歌六帖が手に入つた。他にも福原さんとの話はいくつ

もあるが、省略。後年、風間書房さんとは、私家集全釈叢書の編集委員として縁が繋がつた。その縁は、絶対にならないと言つていた職業。大学を出たら家を出て行くと言つていたが、3年の終わりの網膜剥離で頓挫。悩んだ結果、都立高校の教員志望に変更。卒業延長も考へて計画を変更した。しかし、夏休みに、恩師雨海博洋先生から、卒業論文の原稿を持参するようにと。読み終えられて、このまま提出するように、大学院に進むように、お金がなかつたら貸してあげると。帰宅して、母にその話をしたら、他人からお金を借りるものではないと。計算しなさいと。結果、大学院に進学した。四つ歳上の松田喜好先輩が、都立板橋高校の非常勤を紹介してくださつて、そこで出会つたのが、お茶の水女子大学の平野由紀子先生、私家集叢刊の編集委員長です。

同期の親友宮坂東君が、家を出る計画をしていたことを知つていて、墓は持ち山に用意してくれると。しかし、彼は先に逝つてしまいました。でも、お墓も同期の縁で、お墓と夫婦別姓の研究者の井上治代さんに甘えようかと、ふと思つ70歳です。

(昭和53年二松學舎大学大学院文学研究科博士課程中国学専攻満期退学。文学部教授。図書館長・副学長歴任)

## 「ありがとうございました」



若井田正文

私は、平成26年4月から7年間、二松学舎大学でお世話になりました。多くの方々を支えられて過ごすことができ、心から感謝致しております。

最初の年は、文学部に所属していましたが、就任して1カ月、5月1日付けで教職支援センター長を拝命致しました。当時、文学部にあった教職課程と、教務課で担当していた教職関係の事務、教職支援センターで担当していた教職履修学生への支援という三つの業務を一本化し、新たな組織としての教職支援センターを立ち上げることが、私の任務でした。

教職支援センター長は結局5年間の務めでしたが、教職支援センターや教務課等の皆様のご尽力により、2年目に新たな教職支援センターを立ち上げ、業務を円滑に進めることができました。センターの名称も「教職課程センター」と変更して、学内の教職課程業務の中心となる組織として整えることができました。これも多くの方々を支えていただいた結果であり、心から感謝致しております。

この7年間で最も思い出に残っていることは、やはり学生の皆さんとの交流です。私は、元々都立高等学校の教員でしたが、その後教育委員

会に入り、幼稚園から高等学校まで担当し、学校教育全般を体験してまいりましたが、大学で教えることは初めてでした。二松学舎大学で教えるようになって、最初の印象は、大學生が高校生のように見えたことです。私が以前教えていた高校生とあまり変わらない、というより、高校生より幼く見えたことが意外でした。考えてみれば、私が高校の教員のとき、高校生とは10歳〜20歳しか歳の開きがなかったのに、二松学舎大学での私と学生は40歳〜50歳も離れているのですから当然とも言えます。しかし、学生の皆さんも4年生となり、夏の教員採用選考を受ける頃になりますと、大學生らしく感じます。さすがです。

私は、2年目から文学部を離れ、教職支援センター所属となりました。センター所属の教員は、3年・4年次のゼミを担当することができないことが残念でしたが、7年間で得た学生の皆さんのお付き合いは、これからも大切にしていきたいと思っております。

結びになりますが、様々ご支援ご指導をいただきました二松学舎大学の皆様、松茶会の皆様のご健勝とご発展を心からお祈り致しますとともに、厚く御礼を申しあげます。

(都立高等学校教諭、東京都教育庁指導主事、世田谷区教育指導課長、世田谷区教育長を経て平成26年から二松学舎大学特別招聘教授)

## 退職にあたって



町田哲夫

昭和49年3月二松学舎大学を卒業し、中学校国語科教師としてスタート。以

来38年間、埼玉県の教育に関わってきた。卒業証書授与式を4日後に控えた平成23年3月11日東日本大震災発生。地震・放射能汚染等、未曾有の事態を経験する。その年の3月に定年退職。一年間の再任用校長として学校に残る。その間は、放射能対策、耐震・危機管理マニュアル策定の連続だった。平成24年、二松学舎大学教職支援センター特命教授として着任。教職関連の授業を担当し、教員志望の学生への指導・相談、教員採用の実績向上、教職課程センターの所掌業務等の命を受ける。

当時、教職支援センターは九段一号館7階にあったが、手狭なため、学生への指導・相談は、11階に設けられた分室で対応した。現在は3階に教科書や教員採用に関する資料スペースや相談ブースが整備され、教員志望の学生の学習拠点となっている。

教員免許取得を目指す学生の特徴は、高校生の頃から既に教師志望という割合が高いこと。故に、授業に臨む姿勢は真面目・真剣である。志望の動機に本学卒業生との出会いを語る学生も多い。

二松学舎で学び、全国各地で教員として活躍する卒業生は三千人といわれたが、団塊の世代の定年退職によって減少傾向にある。しかし、卒業生の進路状況を確認すると、毎年60名程度の学生が教職の道に進んでいる。国語科教員は勿論のこと、採用枠の少ない書道での採用試験合格者もコンスタントに生まれている。また、玉川大学との連携により小学校教諭の免許の取得が可能となり、小学校教員として採用される学生も誕生している。既に社会科教員として活躍する国際政治経済学部卒業生もいるが、昨年度は現役合格者も誕生した。

教職課程センターでは、学生の夢を実現するため、様々な取り組みを行っている。四半世紀続く「教育研究大会」は、卒業生の教育実践を学ぶ場として教職履修学生の参加を必修としている。また、神奈川・茨城・埼玉・千葉の各県には「教員の会」が組織され、地域単位の活動が始まっている。

9年間、教員養成の職に関われたこと、教育活動最後の年にウェブでの授業を計画・発信する機会を得たことは、教職47年の締め括りとして最大の経験であった。

(埼玉県公立中学校教諭・教頭・校長。桶川市教育委員会指導主事、北本市教育委員会教育部長歴任。平成24年から二松学舎大学特命教授)



# 松茶会支部情報

(今号は、支部の状況などを支部長に自由にご執筆いただきました。)

## 北海道支部

### 災い転じて笑顔の年に

支部長 増井義昭

「試される大地」とは、数年前に言われた北海道のキャッチフレーズでしたが、今般の新型コロナウイルス対策では、日本全国、国民がみんなにも「試された」ことはなかったのではないのでしょうか。広い北海道でも、札幌や旭川といった大都市のみならず、地方でも散発的に感染が認められ、日々戦々恐々とした毎日であります。

北海道の支部活動については、年二回の会報は発行できたものの、「支部総会」や「道南分会」「道東分会」「道北分会」「支部新年会」の開催が相次ぎ中止に追い込まれてしまいました。誠に遺憾というほかありません。前号でもお伝えしましたとおり、8月の「支部総会」は「書面決議」として実施いたしました。支部会員には会報に同封して議案を送付し、返信ハガキをもって議決を求めましたところ、多くの皆様から賛成をいただきました。中には事務局への励ましメッセージを書き添えてくださった方も多く、事務局一同いたく感動した次第です。札幌に集合して「顔

の見える総会も当然ですが、この書面決議も、なかなか集まらない方々の「声」が伺えたということ、コロナ禍の災い転じて一筋の光明が見えた感がありました。

新型コロナウイルスの猛威も収まる兆しが見えず、まだまだ予断を許しません。今年こそは、支部活動が例年通りに行われ、会員皆さんの笑顔がふれる一年になることを心から祈念しております。全国の会員の皆さん、コロナウイルスが落ち着きましたら、ぜひ北海道に遊びに来ていただければと思います。

### 支部報発行

- 第61号 令和2年8月1日発行
- ・支部会員の異動
- ・令和2年新年会を開催しました。
- ・支部総会を「書面決議」で行います。
- ・道北分会スタートしました。
- ・休校中の学習を動画配信で支援
- 第62号 令和2年12月11日発行
- ・令和2年度総会議案の議決について
- ・分会総会および支部新年会の中止について

## 岩手県支部

### コロナ禍で教育の在りようを考える

支部長 宮本義孝

コロナ禍で大学はどこもオンライン授業がつついでいるようです。

最近、対面授業を求めアメリカの学生たちが起こしたデモをテレビで観(み)、考えさせられたことがあります。

昨年亡くなった小山尊史さんは、たまたま帰る電車の中で一緒になった石川梅次郎先生から就職のことを聞かれ、決つていないと応えると、盛岡はちよつと遠いが、それで良ければ、明日、履歴書を持って来るように、と言われ、卒業後は岩手の地で教職に就くことになりました。

また、長く岩手の書道界を牽引された佐藤紳夫君も、在学中から石橋啓十郎先生のお宅に出入りし、先生の仕事を手伝ったり、講演などで出掛ける時は、お伴させてもらったそうです。

大学や松茶会の活動に協力的な卒業生は大なり小なり母校に生かされた、と云う経験を持っているようです。

逆の場合もあります。会報を送り、いくら呼びかけても反応のない卒業生がおります。中には、大学とは係わりたくないから、文書は一切送らないようにと、わざわざ断わってきた御仁もおります。

た。

団塊の世代である我々は、大学からは十把ひとからげの扱いだっただ、という批判を耳にしたこともありま

す。オンライン授業は、知識の伝受に限つて言えばそれでもいいのだけれうが、あこがれる先達、友達に自分を重ね、切磋琢磨し、自己を向上させるには、どうやら無理のようです。教育の基本は、やはり人と人、心と心が向き合うことによつて成り立つようです。

大学も、卒業させれば、それで良し、ではなく、学生の心に何を寄与できたか、で考えるべきでしょう。多分、今後の大学の評価は、この一点で決まると思うのですが…

### 支部報発行

- 第94号 令和2年11月15日発行
- ・游於詩 千葉 仁さんと漢詩
- 第95号 令和2年12月6日発行
- ・誰が鐘を鳴らしたか〈三幕四場〉

## 宮城県支部

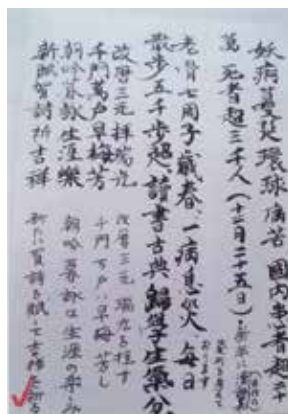
### 支部情報

支部長 二上久芳

コロナ禍により、昨年の支部総会は中止せざるを得ませんでした。そこで、会員の皆さんに葉書を出し、近況を書いてもらいました。(15名の皆さんより、返信をいただきました。)それを会報にまとめ、皆さんに送付しました。その中で特に、全

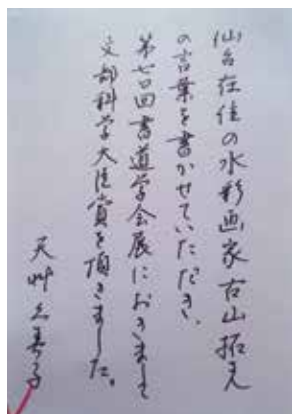
国の会員の皆さんにお伝えしたいことが2点、ありますので、ここに掲載させていただきます。

その一、前支部長、千葉 仁さん(文27)の漢詩です。



これは近々、他の漢詩と合わせて一冊の本にまとめられて出版されるそうです。

その二、天艸久美子さん(文52)が、書道展で大臣賞を授賞されたということです。



3月27日から29日にかけて、仙台メディアテイクにおいて、学会展、学生展の作品を展示発表されるということです。

他にも支部の皆さんが、各々の所で頑張っておられます。今年こそ、支部総会ができることを願っています。

### 埼玉県支部

#### 支部情報

支部長 青木一弥

埼玉県支部におきましては、昨年度の支部総会以降、コロナ禍の影響による活動自粛が続いています。

ここ数年、支部総会が1月下旬から2月初旬にかけての開催であったため、年度当初においては、コロナ禍も終息に向かい、例年どおり実施できるものと考えていました。しかしながら、2度目の緊急事態宣言発令中の埼玉県においては、中止せざるを得ない状況となってしまいました。一年に一度ではありますが、総会・懇親会において、松茶会本部や支部会員の皆様と顔を会わせ、近況や学生時代の思い出話に花が咲く楽しい機会も、今年度はお預けとなり、誠に残念でなりません。

埼玉県支部といたしましては、「明けない夜はない」を願いながら、来年度こそ、支部総会・懇親会を含め、充実した支部活動が再開できますよう準備をしておりますので、その際には、何卒ご協力賜りますようお願い申し上げますとともに、全国各支部のご発展と、松茶会会員の皆様のご健勝を心よりお祈り申し上げます。

### 東京都支部

#### 支部報発行

○第69号 令和3年1月1日発行  
令和3年年度所感

#### 支部長

矢澤喜成

疫病は未だ猖獗を極めており、予断を許さない事態が続いています。東京支部の皆様にも、苦しい生活を余儀なくされている方も多い事と存じ、心が痛みます。矢澤自身も、様々な計画の変更や生活様式の変化から、連日多忙を極めていた次第です。

令和2年度の東京都支部は、早々に支部総会・講演会、文学・歴史散歩の中止、支部報発行による昨年度の決算、今年度の予算・活動計画の承認とさせて戴きました。強く反対された役員もいらっしやいました。が、何よりも会員の皆様の安全と健康とを優先した上での判断でした。多方面よりの賛辞も戴いており、大方の賛同を得られたものと存じます。が、御意見や御提言がありましたら、事務局迄御寄せ戴ければ、有り難く存じます。

扱、令和3年度の活動計画ですが、向後の感染拡大が予断を許さず、殆ど見通しが立っておりません。状況を見据えて冷静に判断したいと存じます。此方の件も、御意見や御提言を賜れば幸甚に存じます。今年度も御協力の程宜しく御願ひ致します。

先日、渡辺大雄監事の連絡で、野口悦子常任幹事の訃報に接しました。数年前、カラOKの隣席で、闘

病生活の苦衷を伺った事が思い出されます。東京支部の活動には多大な御協力を戴きました。末筆乍ら御冥福を御祈り致します。

・ 昨年を振り返って

顧問 井上和男 (42期)

・ えっちゃんの御霊に

浅野米子 (51期)

・ 悦子先輩に捧ぐ 阿部裕美 (52期)

・ 西アフリカ、ベナンから

英語教師 倉科茉季

・ 成熟した精神を手渡すこと

幹事長 片山聖英 (50期)

### 神奈川県支部

先輩の努力に感謝して支部存続の歩み

支部長 平野光治

新型コロナウイルスにより令和2年度は総会・文学歴史探訪・賀詞交歓会の主事業を中止といたしました。令和3年を迎え、支部報掲載により承認をお願いいたしました事業実施に向けて準備を進める予定でした。しかし、1月8日〜2月7日までの緊急事態宣言により先の見通しが全くつかなくなりまして。公共の場での「鼻出しマスク」や「黙食」が話題となり個々の意識に警鐘を鳴らす事態となっております。本年の事業実施に大きな課題となりました。神奈川県支部は昭和50年10月に二松學舎創立百周年を機縁に支部会開催を決定し、再出発の歩みを始めま



した。昭和52年12月に支部会が開催され、昭和55年、56年の総会を経て56年に支部報が創刊されました。創刊号に掲載された役員、会費納入者名簿を見ると現在も役員や会員として活躍いただいている人が多くいらっしゃいます。

令和3年1月4日にご逝去されました中川俊一郎様(文43)は再出発当時からご尽力を賜り、近年は副支部長として総会の司会や式次第の準備、諸事業へのご協力をいただいております。神奈川県支部の歴史を支えていただけて、信頼できるお人柄もあり、支部の大黒柱として長くご支援いただきました。

謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

会員数や会費納入者の減少、事業への参加者の減少、若い会員がいないう等多くの問題を抱えています。支部存続にご尽力いただきました多くの先輩の皆様の思いを受け継ぎ、感謝の思いを持って支部運営に努めていきたいと考えております。

二松學舎松苓会本部、ご交流いただいている各支部の皆様、神奈川県支部の会員の皆様のご支援、ご協力をお願い申し上げます。

◆支部報発行

○第40号 令和2年10月10日発行

・令和2年支部賀詞交歓会報告

・令和元年文学歴史探訪報告

・令和元年度決算・令和2年度予算

(案) 令和元年度事業報告・令和

2年度事業計画(案) 監査報告書  
ご了承、承認のお願い  
会費納入者名簿

三浦の景勝「秋谷の立石」

松丸由文

長野県支部

三島中洲先生撰文による伊沢修二先生記念碑について

支部長 清水 登

令和元年度総会が役員のみにて7月25日(土)、ホテル信濃路において開催され、その後、コロナ禍のため支部活動は自粛となっており、総会において会員の委任状等により活動方針(新体制を含め)が承認されました。今回、北野里美さん(文57)に新たに幹事として就任していただきました。若い感性を発揮していただき、文学散歩の充実及び新規事業を含め支部活動の発展に繋げていただければと期待しております。

長野県支部恒例の文学散歩が令和元年9月23日(土)、上伊那・高遠を中心に行われ、伊沢修二生家の敷



伊沢修二先生記念碑

地に三島中洲先生撰文(大正8年3月)による伊沢修二先生記念碑が設置されていることについては、松苓会報第63号に報告いたしました。その詳細については高遠町図書館による刊行物(『伊沢修二―その生涯と業績―』の「はしがき」)に説明されており、その概要は次の通りです。

- ①大正9年(1920)5月、高遠公園に伊沢修二頌徳碑が建立され、昭和54年(1979)伊沢修二生家の前に移転されたこと。
- ②三島毅(枢密顧問官)の撰文であり、書は、岡田起作(東京女子高等師範学校講師)であり、近來稀にみる名碑といわれていること。
- ③919字に及ぶ、三島毅の漢文は、修二の全体像を画いた名文であること。

高遠と二松學舎との浅からぬ因縁を感じる記念碑との出会いでした。

新潟県支部

三つの研修

支部長 坂井福作

二松學舎で学部、院とお世話になり、田中伸先生のゼミに所属して近世文学を学んだ。その後、高校教師の道を歩みはじめ、国語を教えるためにいろいろな分野の本を読むようになった。教えると同時に自分も学ぶという気持ちを抱いたものである。教員生活10年目に一つの転機が訪れた。

高校は伝統校もあれば新設校もあり、生徒の学力も様々である。古典文法の時間を取って教えるところもあれば、そうでない学校もある。丁度そのとき勤めていた学校が、生徒の学力が低く、古典の授業では本文を読むのも難しい生徒もいた。しかし、生徒たちには国語の授業に興味を持ってもらいたいという思いでいっばいだった。ノートの書き方の指導をしたり、板書の工夫もしてみたら納得がいけない日々が続いた。

そんなとき、新潟県で実施している「内地留学」という制度があり、当時の校長から応募してみないかと言われ母校へ内地留学することになった。半年間、多くの先生方からご指導いただいた。鳩貝先生からは国語の研究会に誘っていただき、下玉莉先生からは枕草子、針原先生からは万葉集、雨海先生にも大変お世話になり、学生時代に戻った気分が古典を読む機会に恵まれた。職場に復帰し、県立教育センターにおいて「古典の授業改善」について研修する機会を得、国語教師として生徒のためにかすことが出来た。

二つ目の研修は、その10年後につくば市で行われた文科省の「中央研修」である。一カ月、全国から集まった先生方と寝食を共にし、様々な分野の先生方の講義を聴くとともに、グループ活動をおして先生方とも交流を深め、今でもつきあいが続いている。翌年、アメリカに2週

間の短期研修へ出かけた。ワシントンDCからニューヨークにかけて、学校視察と教育行政との懇談会をもつことで知見を深めた。三つの研修で得たものが、教員生活を送る大切な柱となった。

## 富山県支部

### 社会貢献とは

支部長 小島貴雄

コロナ禍において支部活動の見直しが求められています。三密を避けた活動を検討することすらできないのが現状で、本来昨年内に5年周期の総会を開催予定でしたが、実施できないままに年を越してしまいました。コロナ終息期には新たな運営を模索するための打ち合わせを行う段取りになっています。

私事ではありますが、昨年4月から新設の単位制の高等学校からの要請で、3年ぶりに教壇に立っています。集団生活を不得手とする生徒が主体ですが、単位習得に向けての意欲が感じられ、目的達成の為の支援に努めています。昨年教員免許更新講習が大学では開講されませんでした。今年が大学での講習を新鮮な感覚で受講したいと楽しみにしています。

幼稚園児の送迎バスの運転を営みながら、富山県被爆者協議会の会長として、昨年7月にヒバクシャ証言集を再編発行し、県内を始め全国の

関係者に配布しましたが、好評を得ました。また父が体験した、秘密特攻隊マルレと救援援護の入市被爆の内容が地元放送局により番組制作され、更には再編集後に全国で放映されました。松苓会員を含め、全国からの問い合わせがありました。ヒバクシャの恒久平和と核兵器廃絶への想いを叶えるべく、二世として核兵器禁止条約の発効の年に精進したいと思う日々を過ごしています。

## 愛知県支部

### 近況報告

支部長 松田博文

皆様ご無沙汰しております。愛知県支部の松田です。

昨年は、コロナウイルス一色の年となっていました。本来なら東京オリンピック、五輪イヤー毎に開催しようと決めた支部総会等々様々な行事が中止となっていました。

今年こそは支部総会をと思うものの、この状況がすぐに終息すると思えず、複数年withコロナといった環境下での日常となりそうです。

この情勢のもと急速なICT化に伴い、知恵を出してついでにこうとする自分と面倒だと思おう自分の狭間でもがいています。

とりとめのない内容になりましたが、皆様のご多幸と前向きな日常に

なることを祈念してご挨拶とさせていただきます。

オンラインでなく、いつの日か皆様に再会できることを信じています。

## 奈良県支部

### 油断大敵

支部長 辻一(眞)

私は薬師寺で得度して早や10年、数えて75歳になります。

健康とは「健体康心」。体と心とが相まつての健康。身体だけではなく大事な心です。

薬師寺は680年天武天皇が皇后(後の持統天皇)の病氣平癒を祈って発願してできたお寺。大和三山に囲まれた藤原京に創建されました。東塔と西塔、塔が二基ある最初の寺で、飛鳥時代の後期白鳳文化を代表するお寺です。その後平城京に遷都され、現在の地へと遷ってきました。薬師寺のご本尊は薬師如来さま。健康の佛さま。健康第一！私たちに最も身近な佛さまです。

今皆さんに申し上げたいのは「油断大敵」。ことばでは簡単なのですが、油断をすると病氣(命取り)になるということ。気が緩んだり注意を怠ると大変な目に遭うので、油断しないようにすること。そして、日々当たり前と思って暮らしているこの日の時間は、一人(己だけ)で生きているのではなく、生かされて生活

しているのだと気づいてほしい。そして実感すれば、自ずと喜び感謝の念を抱き、一日一日が有難い心持になるはずであります。「ありがたい」とは有ることが難しいということ、減多にないことをいいます。

毎日が当たり前ではなく、経験したくても経験できない、ありえない稀有な日々。一日一日を気を抜かず、有難い気持ちで、貴重な経験をしているのだと心に刻んで生きなくてはなりません。その強い思いその行為が祈りになるのであります。

「健(すこ)やかな体・康(やす)らかな心」に少しでも近づけますよう身体安楽をご祈願申し上げます。

禍転じて福となす、よう祈りましょう。

合掌

## 広島県支部

### 二松學舎との出会い

支部長代行 金子徹

一昨年の晩秋、長年にわたり広島県支部の活動をずっと支え、多大なる貢献をいただいた平岡支部長が勇退されるといふ知らせを受ける。本部より取りあえず支部長代行を務めるよう要請をいただいた。微力ながらお役に立てればと準備を始めていた矢先、3度目の脳梗塞を患い入院。左半身麻痺という重症に加え、コロナ禍と重なり、全てが止まってしま



## 宮崎県支部

### 現況報告

支部長 内村厚夫

うという最悪の事態に陥った。5カ月の入院ののち杖を頼りに何とか立ち上がるころまでには回復した。職場にも迷惑をかけながらも辛うじて教壇に立っている。ただ、車椅子と併用なので殆どが座っているのだが。さて、二松學舎と私の出会いについてだが、高等学校時代の2人の恩師との出会いに遡る。『私が北京にいた頃は』といつも軽妙な語り口で授業が始まり、漢字の成り立ちを盛り込んだ楽しい展開に惹き付けられた方がかつて二松學舎で教鞭を執っていたらっしゃった竹中教授のご子息であった。おもしろい学問があるものだと興味をもったのをよく覚えている。もう一方は、学生にとっても厳しく大きな声で躍動感のある授業を繰り広げていらした望月先生である。この方が二松のOBであった。現職中に病に倒れられたのは残念でならない。漢文のおもしろさに出会った高校生活であった。

そして二松學舎を進学先に決定づけたのは、一冊の本との出会いであった。『漢字の起原』である。頁をめくると加藤先生の講義が受けたい！二松にいく。これのみである。まさに人生を決定づけた一冊であった。ただ、残念なのは当時、加藤先生はすでに学長であり、病にあって一度もお顔を拝することなく、私の願いは断たれてしまった。己の運の良さと同時に併せ持つ運の無さにあきれざるばかりである。

## 鹿児島県支部

### 思いつくまに

支部長 岡元正昭

卒業から57年が経った。靖国神社の桜の木も大きくなったが、大学の校舎も大きくなった。当時の校舎は木造の2階建てだった。昭和34年4月入学、国語と書道の免許をとるためにはるる鹿児島より上京、当時は急行列車で30時間くらいを要した。人や車の多いのには驚いた。今では都電もなつかしい。休講があると神田の古本屋へ足を運んだ。途中で、玉川堂で大きな硯を買ったのを記憶している。大学紛争など大変な時代だった。時間は沢山あるが金がない。大学3年生までは高校時代と同じくらい出校して講義を受けた。当時の教師陣はこの大学にも負けないくらい有名な先生ばかりだった。加藤常賢先生は論語の授業中よく舌をならして風呂敷を広げ本は全然見ないで授業をされていた。関良一先生は枕草子の授業、若く声に元気があつた。山岸徳平先生は源氏物語を教えてもらった。授業が始まると息づかいが荒いので先生に聞くと「前の講義をした学校から走って来た」という。本当か疑った。石橋先生、金子先生、鈴木先生と書道の授業は特に熱心だった。先生方の示範される時の筆の運びは今まで見たことのない動きで、書かれた字も生き生きとしていた。いつかは自分もこの先生

## 同期会・OBOG会

『二松剣』（剣道部OB会紙）第9号

発行

○第9号 令和3年1月1日発行

A4判 6頁

寄稿者は次のとおり

- ・西野正修（文34）「両手剣と片手剣」
  - ・渡辺住香（文56）「剣道部18回生」
  - ・篠原 寛（文41）「関東学生剣道連盟加盟願末記」
  - ・山崎貴子（文54）「剣道部16回生」
  - ・上栗一樹（現役2回生 主務）
  - ・齊藤裕幸（文55）「剣道部17回生」
- 「久しぶりに美味しいもの見つけた」

# 大学だより

## 『卒業生採用担当者研究交流会』開催！

キャリアアセンターでは、採用担当業務に携わっている卒業生に向けて、本学の就職支援の取り組みについてご理解いただくとともに、新卒採用について合同で研究し研鑽を図る機会とする『卒業生採用担当者研究交流会』を企画、開催いたしました。

採用業務について情報交換を行い、二松学舎大学の卒業生どうしのネットワークを構築し、交流を深められる機会として、昨年度に引き続き、第2回目の開催になります。

昨年は大学においていただきましたが、今年はZoomを使ったオンラインでの実施となりました。逆にオンラインになったことで、遠いところでは新潟からの参加もあり、オンラインのメリットを活かした開催になったと思います。

当日は9社9名の卒業生が参加し、キャリアアセンタースタッフによる二松学舎大学の授業状況および就職支援の状況の説明や、企業からのコロナ下での企業の新卒採用の事例発表、そして情報交換および交流と、あつという間の2時間半でした。

研究交流会には松苓会長も参加いただき、卒業生と交流を持っていただきました。松苓会からは、参加

いただいた卒業生に、記念品贈呈の提供をいただきました。記念品は本学の事業会社、二松学舎サービスが取り扱う二松学舎グッズの数々で、いただいた卒業生からは、感謝の報告せられました。

当日の感想を少し抜粋して紹介します。

「採用担当ともなるとなかなか他社の話を聞くことができませんが、同じ二松卒業生という事で、距離を縮めて話すことができました。」

同じ大学の卒業生という共通項があるからこそ、より近いコミュニケーションに繋がるのだと思います。参加いただいた卒業生の在籍する



企業には、学内の合同企業説明会も優先的に案内し、卒業生と在学生の縁を取り持つてまいります。学生も卒業生が在籍する企業だと安心して就職活動に臨めるようです。それだけ卒業生の存在というものは大きく、頼りになるものなのです。

キャリアアセンターは引き続き、卒業生の採用担当者との交流を密にし、てまいるたいと存じております。こちらをご覧になられた卒業生で新卒採用に関わっていらっしゃる方がおりましたら、ぜひ連絡いただければと存じます。

### 文学部に「歴史文化学科(仮称)」設置へ

激しく変動する現代社会、大学に対し、予測不能な時代を生き抜く人材の養成が求められている。こうした情勢を踏まえ、本学の学びの多様性を図るため、二〇一九年度から、学部学科改組として検討が続けられてきた、文学部の新学科「歴史文化学科(仮称)」について、二〇年十二月二十二日に開催された理事会で、設置への手続きを進めることが承認された。

今後は、本学のこれまでの教育・研究活動の実績に基づき、新たな学びを提供する学科として、設置に向けて準備が行われていく。

(『二松学舎新聞』第83号より)

### 朝日教育会議開催 渋沢栄一をテーマに

昨年12月12日、「朝日教育会議2020」(朝日新聞主催・二松学舎大学共催・埼玉県深谷市協力)が九段1号館中洲記念講堂にて、インターネットライブ配信で開催された。

「朝日教育会議2020」とは、10の大学と朝日新聞社が協力し、「教育の力で未来を切りひらく」をテーマに、さまざまな社会的課題について考える連続フォーラム。二松学舎大学では、深谷市協力のもと「渋沢栄一『論語と算盤』から生まれる未来」をテーマに、見えない未来を豊かにするため、私たちはそこから何を学び、どう生きるべきかを考えた。

今年2月14日に放送が始まったNHK大河ドラマ「青天を衝け」の主人公や、新一万円札(2024年発行)の肖像となる渋沢栄一は、本学の創立者・三島中洲先生と親交が深く、第3代舎長を務めた。その著書『論語と算盤』も中洲先生の影響が少なくない。

今回のフォーラムでは、渋沢史料館館長・井上潤氏、本学文学部・町泉寿郎教授、大阪大学・石黒浩教授の講演と、大河ドラマ「青天を衝け」の脚本家・大森美香氏を交えた(オンライン参加)パネルディスカッションを実施。渋沢栄一、夏目漱石両アンドロイドも初共演した。



活発な討議が行われたパネルディスカッション



恩師からの便り

二松学舎の思い出



溝口貞彦

私は定年退職して、すでに12年になる。在職中は教職課程に在籍し、教育法規や教育史

を担当した、一時は二松学舎大学に学生が3分の2が教職をとり、一学年で150名前後が教員に採用されていった。しかしその後は毎年のように下降をたどり、教師になる者は10名程度にまで減少した。それは各地の地方公共団体の教員採用数の抑制等の要因もあったが、教職を担当していた者として慚愧に耐えない。

私はクラブの顧問としては、遊戯(囲碁・将棋・麻雀)を担当した。その中でも麻雀の思い出が多い。私の学生時代は、麻雀は「必修科目」といわれ、入学当初から麻雀のできない者はほとんどいなかった。徹夜で麻雀をやり、翌日授業に出られないこともしばしばあった(これもザンキ)。しかしその後趣味が多様化し、街の雀荘もみるみる減少した。私が顧問となったクラブでも、入学当初麻雀のできる学生は約半数であった。ほぼ週1回放課後に教室の一室を借り、麻雀をしたが、全く知らない学生には、初めに大まかな説明をし、あとは実践形式で、私が知らない学生の後について、パイの捨て

方を指導すると、たいいていの学生は半荘(2周)ぐらいたると、できるようにになった。

私が住む小金井市には、将棋道場はないが基会所は3か所ある。ほかに公民館を会場にした囲碁同好会が30ほどある。市では毎年囲碁と将棋の大会を行っているが、私はこれまで数回入賞し、囲碁も将棋も市を代表して都の大会に出たこともある。最近では午前中はメガロス(体育施設)、午後は市役所から指名された市民会議、また研究会や読書会、また囲碁などで多忙である。

二松学舎大学は卒業生数に対し、教員就職者の多いことで知られている。私はそれに参与でき、石川忠久先生のような有名人や種々な多くの学生と知りあえて幸せであった。最後になりましたが、3年前大学の推薦で天皇陛下と内閣総理大臣から瑞宝章を頂きましたが、その節松茶会から立派なお祝いの品をいただきましたことに、厚くお礼を申し上げます。(名誉教授)

〈編集部注〉

溝口名誉教授は、昭和56年3月、東京大学大学院教育学研究科博士課程単位取得満期退学。

聖徳栄養短期大学教授を経て、平成元年4月に二松学舎大学に教授として就任。平成21年3月定年。同年4月に名誉教授の称号が授与されました。

学生歌とその時代

雨海博洋

ぼくが二松学舎専門学校に入学したのは昭和二十一年の五月だった。その頃の二松学舎は戦災を受け転々として渋谷区代々木富ヶ谷の名教中学校(旧制)の一隅にあった。それは全くオンボロ校舎で、歩いてもバウンドするほどであった。学友で新宿の残飯専門店に栄養補給に行く者もあった。このように述べると暗い世相だけを感じるであろうが、貧しく暗い中にも光明もあった。仮校舎の片隅に雑炊食堂があった。この小母さんが買出してきた食糧をこつた煮にして食べさせてくれた。

当時は、連合軍の占領下であり、マッカーサー元帥の命令一つでゼネラストも中止するといった情勢であった。このような世相の中にも何かを求めようとする意欲は旺盛であった。ぼくも二松の演劇部を作り、その手始めとして沖繩民謡の「瓦屋節」をもとに、「瓦焼く煙」という脚本を書いた。台風に悩まされる沖繩では瓦を必要とし、その技術者を中国から招いた。これが横暴を重ねて人々を困らせた。美しい人妻がその犠牲となるのだが、それを中心に抵抗者の姿を書いた。ところが学生演劇といえども、当時は連合軍総司令部(GHQ)の検閲を受けなければならなかった。そのGHQから呼び出しがあり、沖繩を舞台に抵抗者の

姿を描くのは軍に対する意図があるのではないかと追及であった。当時の塩田良平学長からは、「君はとんでもないことをしてくれたね」と叱られた。学校にも累が及ぶかも知れないからだ。しかし米軍批判の意志はなく、純粋な史劇であることを述べて許された。国学院大学の講堂を借り、国学院の女子学生に出演してもらって(当時の二松は共学ではなかった)、公演した。あの広い講堂がいっぱいになったのも嬉しかった。

二松学舎が間借り生活に別れを告げ、今の三番町の焼跡に校舎新築(現在の鉄筋コンクリートの校舎でなく、その前の木造校舎を指す)するに及んで、二松健児の意気ますます上り、何か学生が声高らかにうたえる歌を作ろうではないかと声がかかってきた。そこで自治会委員長であったぼくが中心になって、学生歌制定委員会を作り、歌詞を募集したが適当なものがなく、森本治吉先生にお願いすることになった。先生は学生の意を汲んで、情熱を傾け、ご苦心の末に成ったのは、現在の学生歌「聞けよ若人」であった。長く暗かつた世界大戦は終り、新しい世界建設の息吹が起ってきたところで、「世紀の嵐遙けく去りて 時の鐘何をか語る うら若き息吹は燃えて」の歌詞には大きな感動を受けた。また欧米崇拜の風潮の最中、東洋の主体性を求めて二松に入った我々には「見

よや若人 亜細亜の学の花咲き満ちて……人の世の流離を越えて 久遠に生くる」の詞には誇り高いものを感じた。特に我々の愛唱したのは第三節の「集へ若人」で「腕くみて共に進めば 命に通ふ 友垣ここに結ばれ 青春花旺なり」と肩を組み感涙にむせびながらうたったものだ。

ところが、作曲の点で困ってしまった。金がないのである。その時コロナ専属の作詞家野村俊夫氏を思い出した。氏はほくと同じ町の人であった。自分の書庫を人々に開放し、地元の青年文化会の顧問でもあった。そこで思い切って学生歌の作曲で困っていることを訴えた。一応考えてみようとのことだった。このような割に合わない仕事の受手はないと半ばあきらめていたところへ、野村氏から古閑裕而氏が何やら引き受けてもよいとのこと伝えられた。古閑裕而と言えば当時でも相当有名な方であった。作曲料についてはと再度念を押すと、古閑氏が学生の心意気と森本先生の作詞にほれ込んでやってみようとのことだった。曲成り、再びお礼のことを尋ねると、まあいたただくならご縁があったのだから五円にしましょうと。二十数年前から五円ではあまりに安い。なにがしか添えて差し上げた。さらに野村氏はコロナのスタジオで伴奏付きで吹き込んで下さった。その時感動にうちふるえ、感涙に頬をぬらしながら声を張り上げてうたったの

が、粟飯原、石井、近藤（信）、白鳥、丸子と雨海であった。このような善意の集まりで出来上がったのが「聞けよ若人」の学生歌なので、暗い混迷期の明るい思い出でもあった。（第十九回生）

（注）『二松學舎百年史』（昭和52年10月発行）より転載。  
雨海博洋先生は、現在松茶会顧問、二松學舎大学名誉教授・元学長。

### 卒業生だより

#### 助川忠弘さん（政3） 柏市議会議員に就任



国際政治経済学部を平成9年3月卒業の助川忠弘さんが、昨年（令和2年）9月、千葉県柏市議会の議長に就任されました。

助川さんは、本学卒業後、平成19年に柏市議会議員に初当選。令和元年には連続4期目の当選を果たしていました。この間、教育民生委員会、市民環境委員会、建設経済委員会、下総基地特別委員会などの委員長を歴任、平成30年には副議長に、そして今回議長に就任されました。併せて千葉県市議会議長会の会長にも就任されています。

助川さんは、平成23年から松茶会本部の常任幹事を務められています。

#### 七沢ゆきのさん（文72） 『江戸の花魁と入れ替わったので、花街の頂点を目指してみよう』を上梓

文学部国文学科を平成16年3月卒業の七沢ゆきのさんが、第5回カクヨムWeb小説コンテストのキャラクター文芸部門で大賞を受賞。受賞作「ナンバーワンキャバ嬢、江戸時代の花魁と体が入れ替わったので、江戸でもナンバーワンを目指してみよう（歴史女で元ヤンは無敵です）」を、このたび富士見L文庫（KADOKAWA）として上梓されました。受賞作の選評では「キャバ嬢と知る遊郭と江戸。考証は真面目、中身はラブベ」と好評。

作品にはページ毎に注が施されており、遊郭や江戸を知る親切な対応がなされている。著者の七沢さんからは、二松學舎大学で受けた学恩への感謝の言葉が寄せられています。



◆第14回三田文学新人賞受賞の四国大学教授佐々木義登さん（文59）が、昨年10月25日付の朝日新聞（四国版）で、「よろしく、元氣人に聞く」で

紹介されました。

2017年に「徳島文学協会」を設立し、徳島文学協会会長。文芸誌「徳島文学」を刊行。徳島県出身の作家「富士正晴全国高校生文学賞」創設との関わり、北條民雄「徳ぶ会」など、「郷土の文学」を発信する意欲的な活動が紹介されています。

◆2013年『襲名犯』で第59回江戸川乱歩賞を受賞された竹吉優輔さん（文72）が、昨年10月25日付の読売新聞（茨城版）の「常陸人」に登場。「司書を務める江戸川乱歩賞受賞作家」として紹介されました。

『襲名犯』（講談社）、『レミングスの夏』（14年 講談社）、『ペットシヨップボーイズ』（16年 光文社）の作品舞台のモデルや、勤務の牛久中央図書館での司書業務（現在は名誉館長も務める）等について語っています。現在は第4作目を執筆中。「今後の目標は40代で直木賞を取る」と意欲的です。

### 会員からの便り

#### 「勝負」について思うこと



神津賢一郎（文27）

新型コロナウイルス 新型コロナウイルス感染は終息の気配がない。昨年の11月25日政府の西村大臣が「この三週間が勝負だ」と強調した。で「勝負」だというから、



よほどの覚悟をもって何をするのかと思つていたら、ただ「様子を見て」ただけのことである。勝負といふのは勝つか負けるかの真剣そのものである。私は空手道に長いことかかわっているが空手道大会に出場する選手は真剣勝負である。「勝負」といふ言葉の意味を軽々しく扱つても中しせざるを得ない状況の中、私が所属する会派（日本空手松涛連盟）の静岡県選手権大会を開催することにした。それこそ真剣に考え工夫して細心の注意を払い実行して成功裏に終ることが出来た。

このことから思つたことはコロナ禍に対して諦観的態度でなく真剣に英知を絞つて工夫をすれば、おかげさかもしれないが「為せば成る」という思いをしたことである。というわけで松苓会本部の皆さんに昨年出来なかつた基本問題検討委員会答申の具現化に向けて推進のため、会議、協議を何とか工夫して進捗させてはと思つたわけです。

ところで勝負するということは真剣でなければならぬが勝負にこだわり、勝ちさえすればよいというものではない。勝つても人の道はずれていけば価値はない。

「企業目的は利益追求にあるが根底には倫理がなければならぬ」といふ意を述べているが、スポーツの世界にも共通している。金メダルを

目的にしても根底に倫理道徳がなければならぬ。

羨望と哀惜と

嗚呼！加茂忍君逝く

永淵道彦（文36）

令和2年2月8日夜、源齋・加茂忍君（36回、書家・二松學舎松苓会元幹事・前大分県支部長）死去する。諸般の事情で訃報を奥さんから受けたのは葬儀後であった。引き継いだ家業と共に、加茂忍君が勤しんだ書家としての高い評価を想うとき、彼の早い逝去は、人生の盟友として無念であり衝撃であった。

昭和39年4月の二松學舎大学入学式で加茂源齋君と出会い、彼の借室に私が転がり込み同居し、大学院を修了して私が郷里の九州にもどる昭和45年春、加茂君も同年、製鉄会社大合併によって通信防災関連の家業も移転となり、北海道から九州にや

つて来て、今日に至っている。私の大学院時代も加茂君は休暇をとり、たびたび上京し、私の下宿に長逗留したが、何とも彼との縁は深い。大学時代の加茂君との同居生活、そして九州移住後の彼との長い長い交流であった。

彼に出会って私を魅了したのは彼

への羨望であった。掲げるのは「フロンティア」（30号・昭和50年7月）に発表された彼の詩篇「けもの道」である。この詩篇には羨望する、私には無い、内なる彼のたぎりたつ情念がうたわれている。

(一)

山の中にけもの道がある  
けものたちの動きが雪に刻まれる  
踏みしだかれ けもの道がそこでききる  
深い雪の中である

かたゆきのころ

人はけものを追う

山から山へ 里から山へと

それでも けもの道は絶えない

ワナを仕掛け 鉄砲を持ち

完全装備の猟師は任務を忘れない

苦勞の多い仕事だ

あとりのできない商売だ

人は考える

仕掛けや銃より性能なものをと

それらは けもの道に仕掛けられ口を潤す

けものは減り

草は相食む

木は朽れ

またたくまにけもの道は消える

(二)

訪ねて来いよ

寒い冬の朝をキンキン音たてて

ラッコの皮の帽子をかぶり

鼻水を凍らせ

眉毛を真白に浮かべて

酒はないのかーと

図太い声を忍ばせ

心待ちする夜はながい

青春からの逃亡である

(三)

海は

ひらべつたい貝のぬきさしならぬ遊びだ

ひとりしかなない強がり

打ち返す青黒い心の痛み

砂の中の点にすぎぬ造りごとの日々  
されどわれら  
あまねく安堵にひたる  
帰り来たる日の  
ありや否や

源齋・加茂忍君の書家としての大きな魅力は、この詩篇に示される、内なるたぎりたつマグマである。そして、何代も受け継いだ、彼のマグマである情念を、私は羨望する。彼はうたう。「ワナを仕掛け／鉄砲を持ち／完全装備の猟師は任務を忘れない」と。「苦勞の多い仕事だ／あとりのできない商売だ」と。そして、書家として未完のまま没したのだ。

人生の盟友として、無念と衝撃を、そして哀惜の念を、私は禁じえない。（筑紫女学園大学名誉教授・松苓会幹事・同福岡県支部長）

回顧 「好きになつてこそ」

持田賢一（文40）



自叙で恥ずかしさを避けよう  
としますと、まるで自慢話。不快をお与えしま

すが、何卒ご容赦ください。

好きな先生が教えてくれる勉強は好きになり、得意にもなつた経験をお持ちではないですか？ 自分が小学3年生の時の担任の先生、指示棒が1メートルの物差し、それで教卓を叩き注目させる。叱る時にもです。女の先生だがとても怖かった。しかし、熱心だった。希望者には2週間

に一度、放課後に習字を教えてくれた。怖いよりも好きな先生に変わった。お陰で、習字が好きになった。

高校では当然、書道を選択した。教員志望の自分は、書道の教員を目指すことにした。後輩が二松學舎大学の案内を抱えて書道室にやって来た。「書道を学ぶために、ここに行こうかと思う。」後輩の言葉に、二松學舎大学を知り、そして入学した。

大学では、高校からの延長で臨書中心の基礎は学び得たが、創作作品の書けないことに苛立ちを持ち続けた。加えて仮名も書けない。専門の先生もいなかったと思う。だが今関脩竹先生が他大学から通って来られていることを知り、先生の授業を専攻した。「とにかく書かなければ駄目なんです。」が、先生の教えのお言葉でした。書家志望ではなく、教員志望でしたが、創作ができないのは情けないと思っていた自分は、故郷所縁の先生を学外に見つけ稽古に通いました。よく面倒を見てもらい、導かれて公募展に出品、東京都美術館に展示される経験をしました。

卒業後、埼玉県立高校の書道教員となり、教えたお陰で仮名も書けるようになった気がします。このことを振り返ると、現役学生の仮名作品の上手さには感心させられます。今の二松學舎は素晴らしい。指導される先生、学ぶ学生達の姿からつくづくと感じ、羨ましく思います。

教職に就いての7年間は、仕事に

慣れることに精いっぱい、作品制作は疎かになっていった。教示可能なことに胡坐をかき、自らの鍛錬を怠っていたはずと、書道を好きにしてもらった高校の恩師に再び教えを請うた。創作の書学は、公募展出品だった。試行錯誤、七転八倒の末に、思い出の都美術館に再び陳列。毎日書道展、読売新鋭展を経て、読売書法展と続いた。だが、2度目の受賞の年、校長就任を機に、またもや職に慣れるのが精いっぱい、出品活動を退きました。やがて定年、出さねば書かない自分を省みて、埼玉



玉県展、県北展に出品を始めた。今や、コロナ禍で両展と

も休止中ですが、好きなことを怠ると「とにかく書かなければ駄目なんです。」の聲が聞こえて来そうです。

思い成就のために、コロナには注意を怠らず予防に努めましょう。  
(元埼玉県立高校校長／元謙慎書道会理事・元読売書法会友／現埼玉県美術家協会会員／松茶会副会長)

### 潮鳴りの聞こえる町で

品川光夫 (文47)

今思えば、『松吟會』は私の学生時代そのものであった。しかし、その『松吟會』は休部となつてすでに



久しく、再々興の話も聞かえてこない。一学年先輩のTの訃報が届いた時のことだった。

「僕は宮古島に帰る。君は僕みたいにならないように」と、留守をしていた私のアパートに置き手紙を残し、卒部・卒業したばかりの3月の終わりに、Tは突然東京を去った。それからわずか半年も経たないうちの急逝。

2年後の夏、2学年先輩のSと私は宮古島を訪ねた。Tの実家では、ご両親や弟妹、Tの友人たちが集い、島の幸と「菊の露」などで私たちを歓待してくれた。Tの母親が三線を披露してくれる。演奏後、Tの父親が「妻は三線の名手なんです。けれど、息子がいなくなつてからは一度も手に取ったことがなかったんです」と、おだやかな表情で語った。

『松吟會』の酒宴。歌と酒で何かを食べている余裕がない。そのためか、出てくるつまみは「冷や奴」だけ「モツ煮」だけということも少しばだった。それでいて、酒に酔っても乱れる者はなく、「竹馬の友」惜別の歌」で酒宴が終わるまでその姿勢が変わることはなかった。

宮古島のその夜、私たち2人は何度この「竹馬の友」「惜別の歌」を歌ったことだろう。そして、『松吟

會』の酒宴が身に染みこんだ私たちを、島の人たちはどのように眺めていたか。

翌朝、帰り支度をしている時、母親が来て「下着も何もぜんぶ洗濯させてください。息子と一緒にいるよんでなんかうれいんです」と云う。昨夜、封印していた三線を取り出した母の心情、そして、振り絞っていた旅程をすべて捨てた。

何日滞在しただろう。父親の持つ釣り船で沖に出、ご両親や友人たちの案内で島中を巡り歩いた。

「東平安名崎」太平洋と東シナ海の潮流のぶつかりあっている様が、眼下に展開する。しかも、この二つの潮流の色はまったく違うのだ。

「前浜」碧い（何と表現すればいいのだろう）海、白い砂浜がどこまでも続いている。もったいないばかりに満ち溢れた光が、輝き広がっている情景。「宮古島は珊瑚礁の島なんだ」と云っていたTの声と顔が、よみがえってくる。「宮古では一番のところがなんですか」と、父親が教えてくれた。ここには、私たちの他は親子連れがいただけだった。

宮古島に住む人たちにとって、この島のものすべてが日常であり、生活そのものである。太古の昔より、父祖から受け継いできたこの琉球先島の大自然と文化を守り、誇りとしてきた無意識の血脈が、この人たちの言葉や挙措から伝わってくる。



離島後、Sも私も、Tの眠る宮古島を再び訪れることはなかった。『松吟會』とその周辺の人々、生者と死者との光芒は、40年という歳月を経た今も、私の眼交から消えない。

すぎし日はゆめまほろしに變はらねどわすれえぬことのあるがかなしき

保田與重郎

災い転じて福と為す

荒到夢形(荒井 到)(文51)

2007年専任の教員を辞して芸人になった。47歳。定年の遙か前だ。友人曰く、「安定した職を捨ててそんな世界に入るなんて、何をやった。学校の金をくすねたか。違う?じゃあ女生徒に手を出したか。出して無いか?女子じゃなけりゃ男子にか?」それ以来プロフィールには必ず「定年前に退職。但し悪い事をした訳ではない」と書く様になっている。

別の友人曰く、「良く女房が承知したな。」

「うん。それだけ俺を愛しているんだらう。」

友人は暫く口をきいて呉れなかった。

※

転職の理由。講談に惚れ込んでいた事は勿論だがそれだけではない。教員時代こんな話を聞いた。

函館の名門、中部高校には定時制もある。昭和初期、函館中等夜学校だった頃、卒業しても上級学校へ

の進学資格が得られなかった。にも拘らず沢山生徒が集まった。と。

退学者も多かつたと言うもの、資格と

離れた学校が若者の心を掴むのは魅力的

な先生がいたからに違いない。翻って自分はどうだ。学校という枠から外れたら、どれだけの若者が話を聞きに来て呉れるかー自分の話術の力を試したかったのもある。(余談。



夜学校は昭和12年、函館夜間中学になり、上級学校への入学資格が与えられた。その第1回卒業生進学先に北大・師範学校等と共に二松學舎の名が記されている。ちよつと誇らしい!結果講師になったのだが、来て下さるのは年配の方。若者は一人も来ない。狙いは外れた。

※

無論、綺麗事ばかりが理由ではない。今だから言えるが、最終赴任校の校長や女性先輩教員のパワハラは酷かった。4階の窓から下を眺めて、飛び降りたらどうなるかと本気で考えた。今生きていられるという事は

転職して良かったのだらう、災い転じて福となったのだと思う。

さて昨年来のコロナ禍で、14年間積み重ねて作って来た講談上演の機

会がほとんど潰されてしまった。けれどもこの苦しみをより良いもの変えて行かなければ苦しんだ甲斐がない。今は先が見えないが、災い転じて福と為すチャンスを探ろうと思っ

ている。読んで下さった皆様にも、福が訪れます様にー。

『政治』の世界でも二松學舎

大和田 伸(政9)



私は現在、東京都杉並区において区議会議員を3期務めている。正直、「人生」とは分からないものである。

幼少時代から本気で『プロ野球』の世界を目指し、学生時代には政治の『せ』の字も分からず、赤点なんて日常茶飯事。友人が勉学に励むのを横目に、私はなぜか揺るがない大きな自信の下、一人黙々と練習に明け暮れていた。そのような人間が、特に『風』に左右されやすい都心の選挙区において、初出馬以来、今も

トップ当選を続けているのだ。周囲も稀有な目を向ける。当然だと思ふ。その時に思い返す一つには、我が母校である『二松學舎大学との出会い』がある。

高校時代、自身の怪我也あり夢破れ、自暴自棄になっていた私に、高校時代の恩師であり二松學舎大学OBの荻部俊一先生(正則学園高校教諭)が、『今は何も見えなくても、

俺を信じて大学に進め』と二松學舎大学への道を照らして下さったのが縁である。

私は大学在学中に、当時の内閣で主要大臣を歴任していた代議士の下、学生ながら秘書として修業をさせて頂いていたが、その際、私と共に学生ボランティアとして活動をしていた学生は皆、多くの政治家を輩出している某私大生や国公立大生。特に、エリート意識が高い彼らと、どんなに頑張っても覆すことの出来ない『差』。それは『政治の世界における学歴』であり、この大きな壁に打ちひしがれていた時、ある講師の先生に仰って頂いた言葉が大きな支えとなった。

『世の中、規模の大きい大学が一流校として捉えられがちだが、年明けの駅伝で有名になった私立大学がまだ専門学校だった時に、二松學舎は既に大学としてこの国をリードしていた。その自覚を忘れないで欲しい』

私はこの言葉のおかげで、地に足を付けて、決して浮かれることなく今日まで研鑽を積むことが出来たと思っている。また、高野和基先生の下、日本政治を基礎から学ぶ機会を得たこと、また、同先生をはじめ、外の世界で学ぶことを快く認めてくれた『高野ゼミ』の仲間巡りに合えた幸運も忘れることは出来ない。

私は現在、重い責任と共に要職を任される立場になってきた。緊張の

毎日である。しかし、私を再スタートさせてくれた二松學舎大学への感謝を忘れず、また、多くの先輩諸氏、また後輩の皆さんへの、多少なりとも『励み』となれるよう、この道を邁進して行きたいと思う。

## 北から南から

（支部報からの再掲）

### 岩手・遠野から

新田泰嗣（政7）

私は、平成8年に二松學舎大学へ入学しました。専攻した国際政治経済学部では、必修科目である英語の他、国内外の政治・経済・歴史などに関連した講義を履修し、大学の中心を日々奔走していました。また、たくさんさんの仲間と出会い、様々なことを語り合いながら、有意義なキャンパスライフを送ることができました。大学4年次では休学して、ワーキングホリデー制度を利用してカナダへ一年間滞在しました。五感をフルに使って現地の自然・人・習慣・文化を農場で働くと共に、放浪するという生活をもしました。そして多



くの学びを得ました。

大学卒業後は、両親と共に岩手県出身で私自身も幼少の時から深く縁があった遠野市へ移住して、消防士として就職しました。

私が現在住んでいる遠野市は、四方を山に囲まれた自然豊かな田舎町です。遠野市と言えば、日本民俗学で有名な柳田国男氏の「遠野物語」をはじめ、カッパの伝説等があります。そうした縁があり、この地で妻と出会い、二男一女をもうけました。

平成23年の東日本大震災では、少なからず被害はあったものの、遠野市は沿岸被災地を支援するための後方支援活動拠点として自衛隊、警察、ボランティア等国内外の様々な団体を官民一体となって受け入れました。私もその支援活動の一員として、被災した釜石市や大槌町での消防、救急活動に従事しました。

大学を卒業してまもなく20年を迎えようとしています。平成から令和に変わった途端に見舞われたコロナ禍の中、感染者第一号になるなどの圧力に耐えての生活が始まったのです。

しかし岩手県民は真面目で我慢強く、困難には負けない精神力を持っています。

それは宮沢賢治の「雨ニモ負ケズ」の精神です。それを支えに生活しています。

（『松苓会東京支部報』第68号より）

### 二松學舎との奇縁

金澤正教（文50）



二松學舎大学を卒業して38年、満60歳の還暦、そして定年を迎えることになりました。再任用であと数年は続けるつもりですが、高校で国語と書道の教員としてこれまでやって来られたのも、二松學舎で学んだという誇りと数多くの先輩や友人、同僚や生徒たちに恵まれたお蔭であると感謝しています。

ところで、二松學舎と我が家にはとても不思議な縁があります。というのは、私共夫婦（妻は52回卒）と昨年結婚した次男夫婦（83回卒の同級生）がともに二松學舎大学出身なのです。卒業生多しと雖も、そう多くはないケースではないでしょうか。

私が二松學舎に進むことになったきっかけは、書家であった父の言葉でした。私が高校時代進路に迷っていた時、もし書道を勉強するつもりがあるなら二松學舎がよいと勧めたのです。漢文や漢詩も能くした父は、書を学ぶにはその根底となる漢学や文字学の素養が重要であることをよく解っていたからでした。

入学後は、書道を専攻する傍ら「語文研」に入部し、中国語の基礎を徹底的に学びました。しかし、思うところあって2年次からは「藝術書道

研究会」（略して「藝書」）に転部しました。当時大所帯だった書道部に對して少数精鋭？で活動していた「藝書」のK君が、「語文研」を辞めてしまった級友の私に声をかけてくれたのです。この「藝書」で出逢った2年後輩が今の私の妻です。あのとときのK君の誘いには今でも感謝しています。

次男の辿った道も私の場合と本当によく似通っています。祖父母である私の両親（実は母も書に携わっています）や私たち夫婦の姿を見て育った次男は、兄や姉がそれぞれの道に進んだこともあってか、書道の道に進むことも進路選択の一つとして考えていたようです。そして、なんと私の高校時代と同様に私の助言で二松學舎に進学することを決意したのでした。入学後はすぐに書道部に入部、多くの仲間にも恵まれて活動する中、誠実な人柄を買われてか部長を務めさせていただいたようです。そして、そこでまた一つ素敵な出逢いが芽生えたのでした。

何だか私事ばかりになってしまいました。今のところ妻も次男夫婦もなかなか松苓会の支部活動に参加できず申し訳なく思っております。いつか揃って参加できるようにしたいと思っていますのでよろしくお願いたします。

（群馬県支部報『松苓群馬』第49号より）



## 学生会員だより

### 学生会執行委員会・学園祭実行委員会

北村あゆか

#### 〈新入生歓迎式典〉

2020年4月4日に開催予定であった新入生歓迎式典でしたが、新型コロナウイルスの感染拡大の影響により形態を変更してオンライン（Zoom）にて11月1日（日）・2日（月）の2日間、開催いたしました。

開催日には、300人以上の新入生が参加してくださいました。今回の新入生歓迎式典は、主に新入生にどのような団体があるかについての紹介のみを行いました。当初は対面での開催を予定していましたが、対面での開催は厳しいと判断し、急遽オンラインにての開催になってしまいました。各団体や新入生の皆様には大変ご迷惑をおかけしてしまいました。特にシステムの不備などの問題はなく開催できましたが、個人的な質問などは受け付けられないなど、在学生や新入生だけでなく、参加して下さる全ての方に喜んでいただくためには課題があると感じました。今後のイベントの際には改善をしていきたいと思っております。

#### 〈執行委員会・実行委員会〉

今年度は例年と比べて入会募集の期間が短いにも関わらず、15名の1年生が入会しました。感染拡大が続いている状況ですので、直接ではな

くZoomなどのオンライン上でしか1年生と交流することができておらず多少不安はありますが、今後はこの新たな15名のメンバーを迎えて、学生会執行委員会・学園祭実行委員会を頑張つて参ります。

まだ新型コロナウイルスの感染拡大が続いており、外出自粛により思うように活動はできていませんが新入生だけでなく在学生、参加して下さる全ての方がコロナ禍でも行えて、かつ参加して良かったと思えるようなイベントを企画・運営していきたいと思っております。オンライン開催などの状況が慣れていないため、皆様にご迷惑をおかけしてしまふこともあるかと思いますが、ご協力いただきながら頑張つて参りますのでよろしくお願ひいたします。

#### クラブ執行部

（国際経営学科 2年）

室那実

現在、二松學舎大学クラブ執行部には3年生7人、2年生7人の計14人が在籍しております。例年、前期・後期に1回ずつ合同部長・会計会議とクラブ総会を、年度末には各団体の決算報告会であるリーダーズキャンプという行事を開催しています。また平日のお昼休憩の際には、2号館3階のクラブ執行部室を開室し、各団体から寄せられる質疑応答などの対応を行ってきました。行事の際には数十人、数百人の学生が一堂に会するため、例年通りの実施方法で

は「密」になってしまいました。それに加えて本年度は極力人と会わないことが推奨されたこともあり、実施方法を見直す必要がありました。そこで大学の授業や他団体の活動を参考にしながらオンラインでの実施案を練り、なんとか開催に至ることができました。

本年度の活動を振り返ると、各行事に適切なツールを選ぶことから始まりました。というのもオンラインといっても使えるツールが豊富にあるため、精査する必要があったからです。双方向型で行う必要がある行事、例えば合同部長・会計会議やリーダーズキャンプではNOBを採用し、オンライン会議の形式で行うことが最良だと判断しました。そして例年、数百人規模で行われるクラブ総会では、人数の問題でZoomを採用することは難しいという事、実施内容が議案の決議のみであるため全員が同じ時間に集まる必要はないという理由から、Googleフォームでのアンケート方式を採用しました。そして部員名簿などの書類はメール提出に一本化したことで、非接触での運営を進めることができました。

現時点（令和3年1月）で合同部長・会計会議とクラブ総会は終了し、残すはリーダーズキャンプのみとなっています。ここまで多くの方々にご協力をいただき、活動することができました。まだまだ課題が沢山ある状況ではありますが、各行事を進

めていく上で改善し、新しい様式での実施方法の基盤を作り上げていくことができればと思っております。

（国文学科 3年）

#### サークル紹介

#### 躰道部

高橋歩美

躰道部は、現在3年生2名、1年生1名の計3名で活動しています。活動としては、週4回の練習、春合宿・夏合宿の実施、各種大会への出場などです。今年度はコロナウイルス感染拡大の影響により、春・夏ともに合宿を行うことができず、開催される予定であった大会も全て中止となってしまったため、従来通りの活動が難しい1年でした。練習は、NOBを使用したオンラインでの稽古をメインに行いました。体幹トレーニングや筋力トレーニングを積極的に取り入れることで体軸のブレが少なくなり、それを躰道の基本的な動作や技などにも生かすことができたと思います。構えや技などお



躰道部の練習風景（上）  
オンラインでの練習風景（下）

互いに見てアドバイスをしあうことで、相手に伝える力を身に付けられたのは勿論のこと、練習のモチベーションを保つことにもつながりました。限られた環境で、どのようにしていけばより効果的な成果が得られるのか、部員それぞれが自分で考えて取り組むことができたと思います。オンラインでの練習は、離れた場所においてもネット環境が整っていればできるため、OB・OGの先輩方とも一緒に練習することができました。来年度も状況に臨機応変に対応し、部としても部員それぞれとしても精神面・技術面ともにより成長できるように、日々の稽古に臨みたいと思います。

また現在部員数は少ないですが、その分部員同士仲が良く、互いに切磋琢磨し合いながら日々稽古に励んでおります。茶道は大学からはじめる人がとても多く、新しいことに挑戦してみたい人にはぴったりだと思います。現在いる部員も、全員大学から茶道をはじめました。

新入生の方には、是非とも興味を持ってもらい入部してもらえたら嬉しいですね。今後とも宜しくお願い申し上げます。

(都市文化デザイン学科3年)

文芸同好会

馬場理久

私たち文芸同好会は、文章を書く、読むことが大好きな部員、総勢31名

が集まり、活動内で短編小説を書いたり、ゲーム形式の活動で文章力や読解力を向上させています。そして、学内のイベントでは、6月のPOP祭・11月の創縁祭。学外のイベントでは、春秋に開催される文学フリマ東京にて、自分たちで一から製本した、冊子の販売を目標に活動しています。

しかし、今年は新型コロナウイルスの流行で、対面活動や多くのイベントを自粛せざるを得なくなりました。そこで、「対面でなくても、なんとかサークル活動が出来ないだろうか」と考えた結果、現在はLINE通話を用いたオンライン活動を行っています。

ただ、今までの対面活動をそのままオンライン活動に流用しても上手くはいきませんでした。今までの活動では、決められた時間内に各々で執筆活動をすることも多かったのですが、互いの顔が見えないオンライン活動では、各々が無言で執筆活動を行うと、「サークルに参加している」という実感が非常に薄かったように感じました。

このことを踏まえ、現在はグループでの対話を重視した議論型の活動を主に行っています。今年は新たに11人の新入生が加わってくれましたが、今年の新入生は殆ど大学にも通えておらず、大学の仲間と会話するという機会がほぼ無いという悲痛な声をよく聞きます。

文芸同好会

である以上、もちろん「読む」という活動も重要です。しかし、大学のサークルでもある以上、「仲間との対話」も同じくらい重要なことだと、コロナ禍での活動を通じ、より実感しました。

現在、文芸同好会の活動は金曜6限に行っています。

(今後、活動日をもう1日設ける予定です)

文章を読み書きするのが好きな方、本を読むのが好きな方、そして小説に挑戦してみたい方がいらっしやいましたら、是非文芸同好会にご連絡ください！部員一同、お待ちしております！

TwitterID @bungei\_bot01



昨年秋に開催された文学フリマ東京の様子



機関誌『陽と波』『二松維新』



Twitterの宣伝

メールアドレス

a2191284@nishogakusha-u.ac.jp  
(国文学科2年)

学生の活躍

松風短詩会、「第6回大学短歌バトル2020」学生短歌会対抗「超歌合」に参加

「第6回 大学短歌バトル2020」がコロナ禍により中止となったが、参加校の詠草が角川『短歌』誌12月号に「学生短歌会対抗超歌合」詠草発表として掲載されました。

参加大学は、大阪大学短歌会、シ短歌会(明治大学他)、京大短歌、早稲田短歌会、國學院大學北海道短期大学部句歌会、北海道大学短歌会、東北大学短歌会、二松学舎大学松風短詩会の8校。

本学松風短詩会からは、八品舞子、寺井茜、郡司和斗さんの3人が参加されている。次に本学学生の詠草を各1首紹介します。

八品舞子(題「クーポン」)  
春の雨まだ降っているのはじめての  
フェを出るときもらうクーポン

寺井 茜(題「羊」)  
洋皮紙の地図の港をなぞりつつ朝風  
になるゆらめいている

郡司和斗(題「片思い(ひ)」)  
片思いのままいくつかの片思い  
冬の桜の木をかいでいる



**松苓会本部の活動**

松苓会本部では改革部会を設置し、基本問題検討委員会答申の具現化に向けた検討をしている。それを紹介する。

第1部会（学生会員・同期会組織担当）は、同期会結成に向けた対応、大学側への協力依頼、同期会運営要領案の作成、卒業年次生に対する説明会の開催、同期会幹事の選出、幹事との連携に係る業務を進めている。

第2部会（組織改革・会則改正）では、会則改正を総会に提案するための具体案を検討している。主な点は、松苓会の組織に「都道府県支部」に加え「同期会」を置く。同期会代表は総会（最高議決機関）の構成員となる。同期会は当面、新卒者から年次進行により設置する。現行の幹事会の見直し。会計の条文を整理し、「終身会員積立金」を見直し、「特別会計」の条文に整理する。「学生会員」の条文を整備する。など多岐に亘っている。

第3部会（新規事業）は、入学記念品の贈呈、「人材バンク」登録募集の実施、古書リサイクルの方法等を検討している。

第4部会（情報化対応）では、ホームページの充実・改善のための検討しており、新年度実現を目指す。さらに、本部の事務局機能を強化するため、関東地区の支部長に本部業務担当者の推薦をお願いした。また会報前号（64号）に募集広報を掲載した。何人かの協力者の申し出があり、今後改革推進のため協力願うことになる。

**改革する松苓会 募集 松苓会本部応援団**

**本部業務のお手伝いをお願いします。**

〈事務、会報づくり、各種イベントや活動等の業務〉

ボランティアで交通費は支給

同窓会活動に、興味・意欲のある方は、お問い合わせ下さい。

問合せ先：松苓会事務局 〒102-8336 東京都千代田区三番町6-16  
TEL 03-3261-7408/FAX 03-3261-8914/E-mail shourei@nishogakusha-u.ac.jp

**「人材バンク」登録募集**

**あなたの力で、会員や大学を応援してください**

会員（含学生）の求める機会に、会員の皆さまの智慧や技能を提供していただく事業を立ち上げました。登録をお願いします。

- 内 容 講義・講話・講演・指導などの講師  
ボランティアを基本とし、必要経費は主催者と相談により決定
- 登録方法
- 1 松苓会事務局に、メールで「人材バンク登録票の送信」を請求
  - 2 登録票と要項をデータで受け取る
  - 3 登録票に入力してメール添付にて返送（実践例があれば添付）

登録申請・問い合わせ先 松苓会事務局 〒102-8336 東京都千代田区三番町6-16  
TEL 03-3261-7408/FAX 03-3261-8914/E-mail shourei@nishogakusha-u.ac.jp

**表紙写真募集**

募集対象者 二松学舎大学学部在学学生  
募集写真 年2回発行（9月と3月）の松苓会報表紙掲載写真  
会報表紙にふさわしいもの。ジャンルは問いません。

募集期間 9月発行号は8月末日、3月号は1月末日を締切日とします。

応募点数 各号とも一人1点

応募方法 写真データ送信先メールアドレスに、件名「松苓会報の表紙写真応募」と入力し、応募者の氏名、学年、学科、連絡先（電

話番号）と写真の簡単な説明（撮影場所等を含む）を明記し、「写真データ」を添えて送信してください。  
\*応募写真は未発表のものに限ります。  
\*応募写真は応募者本人のみに全ての権利（著作権を含みます）があるオリジナル作品に限ります。  
\*掲載写真撮影者には、記念品をお贈りします。  
\*作品の選考・掲載に関する問い合わせは受け付けません。あらかじめご了承ください。  
\*注意事項等詳細は、別途「募集要項」（学内メールで通知）で確認してください。  
\*送信先 E-mail shourei@nishogakusha-u.ac.jp

第89期卒業生同期会

松茶会では昨年度卒業生から新たに同期会を結成しました。昨年度卒業生は88期同期会としてスタートとなりました。今年度卒業生は89期同期会となります。今年度は、コロナ禍により、在学中に同期会の説明会を開催することができませんでしたが、大学側の協力により、同期生の中から中心となって活動してくれる卒業生を募集し、この方々が幹事となり、今後は、この幹事を中心として松茶会本部と連携しながら、卒業後の同期会開催に向けた活動をしていただくこととなります。

同期会の運営要領(暫定)の概要は次のとおりです。

名称は、二松學舎松茶会第89期同期会とする。同期生相互の親睦・連携を図り、母校二松學舎大学の発展を支援することを目的とする。同期会の会員は2020年度(令和2年度)に二松學舎大学文学部及び国際政治経済学部を卒業した者。当面、連絡事務所を大学内の松茶会本部に置く。運営は、同期の幹事を10〜15人位置き、その中から代表幹事、副代表幹事を選出する。代表幹事、副代表幹事及び幹事による役員会(幹事会)を以て運営する。役員会は年1回以上開催する。幹事の任期は5年とし、代表幹事、副代表幹事の任期は2年とする。幹事は会員の動向を把握し、松茶会本部や支部・同期生との連携を図る。最初の同期会は、

当面、卒業5年後に開催することを目標とする。

寄付者芳名

令和2年3月1日から令和3年1月末日までに寄付いただいた方のご芳名を掲載します。(敬称略) たくさんの方のご協力に心より感謝し、厚くお礼申し上げます。

(二口千円)

- 二十五口 小野由紀子 文38 吉永亜理子 文52 鷲尾 和由 文52 丸山 裕 文57 川俣 茂 文63 小鷹 義弘 文63 山澤 陽子 文73 二十口 小田 和磨 専17 三〇口 平野 芳彦 専14 藤田 佳應 文24 小林 政明 文39 中村 良子 文44 小林由里子 文47 齊藤 賢康 文49 天俣久美子 文52 江村 春彦 文57 上田 道子 文68 服部 泰樹 文77 佐藤 元希 文79 清水 広介 政12 二〇口 畑 功 文26 吉野恵津子 文37 清水 登 文42 杉江 訓子 文47 齊藤ゆかり 文51 荒井 俊郎 文54

寄付金のお願い

松茶会では、会の発展のために会員の皆様に寄付金をお願いをしています。松茶会の事業推進と財源確保のために、一口千円で寄付金を募っています。ご協力をよろしくお願いいたします。

- 池谷 賢志 文69 岩原 伸 文52 森山 奈帆 文71 手島 一晃 文56 服部 泰樹 文77 長岡 美佳 文61 一〇口 山本 武司 文37 後藤 由美 文72 本間祺一郎 文38 中野 博之 文73 鈴木 龍男 文44 小熊 雄希 文79 矢澤 喜成 文50 趙 直人 政10 山根 雅彦 文51 趙 崧 政17

訃報

加茂 忍氏(文36) 令和2年2月8日逝去 享年74 加茂氏は、北海道出身。加茂電子工業代表取締役。平成5年第41回詩歌自詠書道展特選、清真会幹事(松茶会報26号より) 大分県支部長を平成13年8月から平成28年4月まで務められた。 謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

表紙写真

武道館のライトアップ写真。東京オリンピックに向けリニューアルした姿。輝いています。松茶会幹事 小林孝彰氏の作品です。撮影は昨秋。(今回はコロナ禍で、学生からの募集かなわず。)

編集後記

先ずは日常の活動もままならぬ中、寄稿頂いた方々に御礼申し上げます。 「人は成熟するにつれて若くなる」という文豪ヘルマン・ヘッセの随想集は味わい深い。つまり、我々はあるときは年寄りだったり、若者になったりするのである。この会報誌が年配者には懐かしさだけでなく、若い方にはまた人生行路のカンフル剤とならんことを願う。

二松學舎松茶会報 No.65 創発編住 刊行集所 昭和62年12月1日 令和3年3月16日 二松學舎松茶会 〒102-8336 東京都千代田区三番町 6-16 03-3261-7408 FAX 03-3261-8914 00180-5-160343 (郵便局払込取扱票) (株)サンセイ 電話 振替口座 印刷



二松學舎大学(松茶会) ホームページ www.nishogakusha-u.ac.jp 松茶会 E-mail shourei@nishogakusha-u.ac.jp